

百年誌

出藍の誉れ

埼玉県立豊岡高等学校

豊高 100 年 *photo story*



百年の歩み

古写真に残された農学校・実業学校



明治神宮直史殿前 大正12(1923)年頃



体操 昭和6(1931)年頃



実習地にて 昭和4(1929)年頃



品評会の野菜 昭和6(1931)年頃



茶摘み 昭和6(1931)年頃



昭和6(1931)年頃 上:英語の授業 右:実験の様子



「黎明」(大正12年〜昭和13年頃)、「躍進」(昭和55年頃)、「光彩」(昭和56年頃)の三分野に分け、創設期から現在までの歩みを追う。

昭和
1927~28

二〇三年

改編を求める声の高まり、新たな門出

校名変更、組合立豊岡実業学校となる

◆組合立豊岡実業学校認可される

昭和二年、開校以来五年が経過し、本校への期待も高まり、組合立農学校の改編を求める声が高まった。前掲文部省令による甲種五年制の学校である。豊岡町は主穀生産のほか茶業・養蚕業など商業的農産物の生産と流通の拠点であり、豊かな商人の町でもあった。

町長野村平吉ほか九か村学校組合の役員は、昭和二年三月、組合立豊岡実業学校を甲種（五か年制）とし、農業科（五〇名）商業科（五〇名）を併設の申請を議決し、文部省に陳情したのである。

ところが、両科を新設するのには多額の資金を要することが判明した。そこで募集人数



粕谷義三
(入間市博物館提供)

を縮小し、農商兼修五〇名編成との案をもって文部省に諮ったところ

ろ、未だ公立でかくのごとき制度の学校はなく、唯一の例が千葉県の一宮に私立実業学校があるのみとの返答であった。

そこで同校を視察し、学則の概要をモデルとし、豊岡町出身の衆議院議員粕谷義三を擁して文部省に再三陳情した結果、農業科・商業科の二科を置かず、農商兼修の二科とし、五〇名募集、修業年限五か年、定員二五〇名が認可されるに至ったのである。

八月二十七日「二種以上の実業学校の学科を置く学校に関する規程」による「学則変更の件認可」という決定であった。そして、九月十五日、校名を変更して、豊岡実業学校とする件が認可され、同日、豊岡町大字扇町屋川越道上に位置変更の件も認可され、十二月二十五日、新校舎が落成したのである。

◆新校舎落成、開校式・祝賀式

昭和三年一月十五日 待望の新校舎落成

◆できごと◆

昭和2（一九二七）〜3（一九二八）年

〈昭和2年〉

3月 昭和金融恐慌始まる

24日 第六回卒業証書授与式

8月 27日 二種以上の実業学科を置く学校に関する規定による学則変更の件認可。農商兼修

9月 15日 校名を豊岡実業学校とする件認可。修業年限五か年、入学資格尋常小学校卒業程度。生徒定員二五〇名

12月 25日 豊岡町大字川越道上（現在地）に新校舎が竣工し移転

〈昭和3年〉

1月 15日 新校舎落成並びに学校昇格祝賀式挙行

3月 24日 第七回卒業証書授与式

4月 10日 修業年限が五年に変更されたことに伴い、第一学年に加え、第二学年・第四学年の入学式実施

6月 4日 張作霖爆殺事件（満州某重大事件）
10月 27日 豊岡実業学校第一回陸上大運動会開催

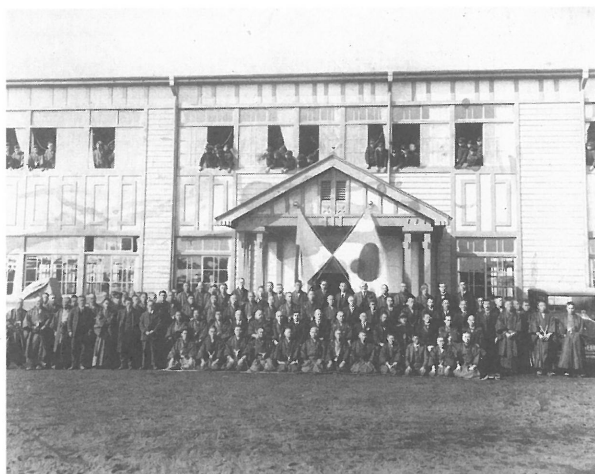
11月 9日 校旗寄贈される

式、ならびに豊岡実業学校開校式・祝賀式が挙行された。近村からの招待者のほか、同窓

生が一〇〇名参加して祝賀したのである。

同年度末を迎え、本校は新たに学則を発表し、新規生徒募集要項を各地の小学校に伝え、選考試験を実施、四月十日、五か年制の生徒、第一学年・第二学年及第四学年の入学を許可した。

開校した本校の校地坪数は六二一四坪、内建物敷地三二五坪、校庭七一二坪、屋外運動場二〇〇〇坪、実習地三〇九七坪（水田二九一坪、穀菽園一二〇〇坪、蔬菜園六〇九坪、果樹園三〇〇坪、花卉園九〇坪、桑園六〇〇坪、畜舎運動場七坪）を数える規模であった。



豊岡実業学校落成式（昭和3年・入間市博物館提供）

◆農業に従事する子弟が圧倒的

学則の一、二を挙げると次の通りである。

「本校は二種以上の実業学校の学科を置く規定により、実業に関する知識技能を授けると共に徳性を陶冶し、実業家としての人格を養成することを目的とする。

第一学年に入学を許可すべきものは、身体健全、品行方正なる年令十二才以上の男子にして、尋常小学校卒業又は同等以上の学力を有する者たること」

この年の三月二十四日、二年制農業学校第七回（最後）の卒業生三五名を送り出した。

前年までの卒業生は一八八名、その職業別を挙げで見ると、自家営業一三七名、兵役として入営一三名、学生として進学一三名、技術員八名、教員三名、官公吏二名等である。

近接地域において、農業経営に従事する地主の子弟が圧倒的であった。

新規開校にあたり生徒募集は第一・二学年、第四学年について実施され、定員超過のため選考し、入学許可を通達した。第一学年七三名（五六名）、第二学年八〇名（五六名）、第四学年五九名（五二名）。カッコ内が合格者数。

開校に伴い、この年より授業料は値上げとなり、学校組合内の生徒は一月金二円、組

合外は金三円となった。開校当初の生徒学資の概算を示すと次の通りである。

書籍一〇円～一五円（一か年）、制服五円～七円（夏冬）、実習服三円、帽子徽章二円、靴八円、上靴一円、ゲートル五〇銭、靴二円、簿記帳二円五〇銭、算盤二円、生徒手帳四〇銭、授業料二二円～三三円、校友会費二円二〇銭、旅行積立金五円五〇銭、用紙代二〇銭、学費雑費一五円。一か月平均額は、学校組合内七円八〇銭、組合外八円八〇銭余り。

◆同窓会改正・校旗の寄贈を受ける

本校の新たな門出を契機に同窓会も改正され、校長を総裁とした。第一回の卒業生野村與三郎が会長に推薦され、年末に同窓会の会報第一号を発行した。また同窓会の活動組織として、文芸部・弁論部・実業部の三部門を設けたのである。会員は相互に喜び・平和・愛情ある生活をもとめ、進んで理想の社会の建設につとめようと宣言している。

この年、十一月九日、同窓会の幹旋を受けた川越市謙受堂書店は、豊岡実業学校の校旗を作成し、寄贈した。



同窓会報（創刊号）

昭和
1963

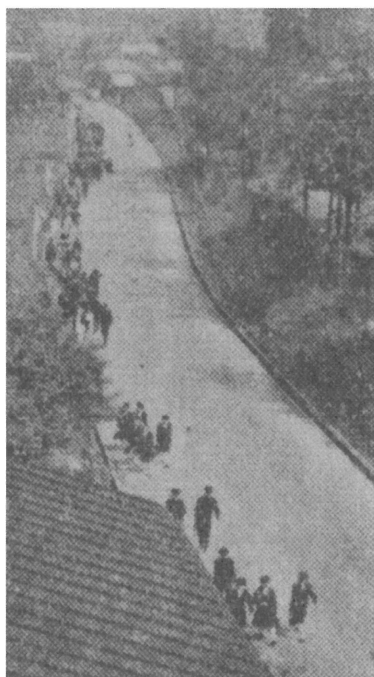
三十八年度 最後を飾る農業科

学校整備計画固まる

❖新校舎（第二期工事）完成する

昭和三十八年は商業科二二名、普通科二六五名合わせて四七七名の新入生が入学した。前年から普通科が設置され、豊高は新しい時代を迎え、多くの生徒が入学し、それに伴い校内の施設も大幅に整備されることになった。

鉄筋コンクリート三階建ての新校舎（現在の一号館東側）は、四月二十二日に起工式が行われ、予算三、八〇〇万円であった。



登校風景（正門付近）

新館（現在の二号館東側）と繋がる渡り廊下部分が昇降口（玄関）となる。新校舎は一階に事務室、校長室、職員室が入り、二、三階は教室となる。

そして、新校舎側に正門が造られ、それまで正門だった所が、グラウンドに入る通用門になった。落成式は三月二十八日に生徒も参加して盛大に行われたが、それに先立ち新校舎への引越は十二月にあった。

また、新校舎の建設と合わせて、講堂の西側にシャワー室が作られ、六つのシャワーが設置され、運動後に汗を流すなど生徒に喜ばれた。これと同時に校庭の各所に水道も設けられ運動環境の整備が図られた。

さらに、混雑きわまりなかったパンの販売所が九月に本館裏に新築され、大きな窓があり明るい作りのものと

❖最後の農業展

農業科はこの年を最後に豊高の歴史の舞台から消えることになるので豊高祭では、精一杯の飾りつけをした。豊高びいきのお客さんは淋しそうに展示物を眺めていた。

そして、三月には二三名の農業科の卒業生を最後に農業科が閉科となった。

❖豊高整備計画

新校舎（現在の一号館東側）ができあがると、さらに西側に新校舎と同じ大きさの校舎を継ぎ足す。本館は取り壊し、体育館とプールを図書館の西側に建設し、その南側が野球場となる。陸上用のトラックが北に移動し、南側にテニスコートとバレーコートができる予定であった。

❖成績の評定方法が変わる

評価方法に十段階法を採用

各学期末に生徒に渡る通知票の記載方法が

なった。そして、今までパンが販売されていたところで牛乳が販売されることとなった。

昭和38(1963)年度 できごと

- | | |
|-----|---|
| 4月 | 9日 入学式
22日 新校舎起工式
日本初の歩道橋が大阪駅前に誕生 |
| 5月 | 1日 女子下校時刻変更
遠足(1・2年) |
| 6月 | 1日 女子衣替え
球技大会 |
| 7月 | 名神高速道路の栗東－尼崎間開通
(初の高速道路)
北海道で皆既日食観測 |
| 8月 | 11日 農校対抗球技大会で総合優勝(杉戸農高にて)最後の出場 |
| 9月 | 国鉄が自動列車停止装置(ATIS)の使用開始
23日 パンの販売所完成 |
| 10月 | 4日 体育祭 |
| 11月 | 1日 女子下校時刻変更
新千円札(伊藤博文の肖像)発行
9日 マラソン大会
17日～22日 修学旅行(四国・京都奈良方面)
遠足(1・2年修学旅行期間中)
30日 } 豊高祭・新校舎落成式
1日 } |
| 12月 | ケネディ大統領暗殺される
23日 収穫祭
力道山刺され死去 |
| 1月 | 12日 陸上部奥武蔵駅伝優勝
28日 演劇同好会発足
中国とフランスが国交樹立 |
| 3月 | 3日 定時制課程併設決定
11日 卒業式
28日 新校舎落成式
イギリス・電子式卓上計算機を開発 |

❖ 陸上部・書道部の活躍

変わり、今まで五段階で記載されていたものが、十段階で表示されるようになった。
ただし指導要録に記載するときは五段階で記載することは変わっていない。理由としては、生徒の活動をより詳細に反映できるということである。

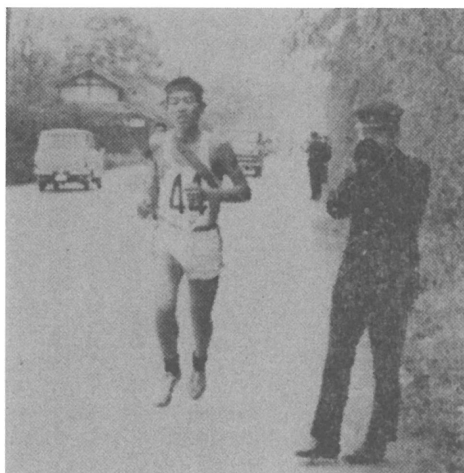
生徒総合体育大会の結果、ハンマー投げ一人、五〇〇〇メートル二人、八〇〇メートル一人の四選手が関東大会に出場し、石井清一、石原孝之の両選手が八位入賞を果たした。また、秋の大宮市営競技場で行われた記録会では、三段跳

びで平本洋が優勝を果たした。

さらに、十一月の全国高校駅伝県予選(大宮ー川越新道間折り返しコース)で二位となり関東大会出場権を獲得した。一月に鎌倉市で行われた第十六回関東駅伝大会に出場し、アップダウンの激しいコースの中、四十校中十二位と健闘した。

また第三十一回埼玉駅伝大会は、深谷ー浦和間で行われ、三十八チームの出場する中、二位でゴールインした。まさに陸上部の活躍が目立った年であった。

その中で、文化部では上野の東京都美術館で行われた全日本書道コンクールで吉沢章が銀賞に入選する活躍もみせた。



全国高校駅伝県予選会

そして、部活動を励ます応援団がこの年から慶應大学の応援団の人をコーチとして招き、慶應型の応援練習を始めた。

座談会

同窓会を語る

日時：令和元年 11 月 7 日

場所：豊岡高校・応接室

出席者： 木下博

仲川幸成

大野満

長谷部安

司会進行：橋本浩



創立百周年記念誌の座談会に、同窓会の木下会長、仲川・大野両副会長、長谷部監事に出席いただきました。常任理事であり、現在、豊高に勤務しております橋本が司会進行を担当させていただきます、同窓会について大いに語っていただきました。

師弟、クラスメート、先輩後輩の繋がりの中で

—— 初めに同窓会に関わった経緯をお聞かせ願いたいと思います。

木下 この案内をいただいて同窓会の歴史を振り返ってみました。記憶が定かではありませんが、おそらく昭和50年代頃から平成に入る頃に、理事、副会長、そして会長とステップを踏んでいったような感じがしています。六十五周年記念の同窓会会員名簿によりますと、歴代の会長と理事の写真があり、私と仲川さんが副会長、小林平一さんが会長となっています。

私が理事になった経緯は、多分人脈を巡る中で声かけをされたという

ことではなかったかと思っています。本校の卒業生で、母校で物理、珠算などの教鞭をとられ、私が卒業後も親しくさせていただいた森田義雄先生から声をかけられ、理事会の仲間入りをさせていただいたように思います。豊高のような伝統校の場合、培われた人脈というものは、いろいろな形で後の世代に引き継がれます。特に同窓会は師弟、クラスメート、先輩後輩の繋がりの中で構成されている組織ですから、人脈と呼ばれるものが色濃く出るのは自然のことのように思います。

—— 豊高は農学校から始まり、幾多の変遷を経て現在に至っていますが、同窓会もそれに合わせて変化してきたと思います。同窓会の歴史を調べてみたところ、昭和50年に木下会長と仲川副会長のお名前が副会長ということ出てきます。昭和50年2月10日の常任理事会で、次の同窓会の会長に小林平一様になることが決まったと記録されています。学校に残っている資料は昭和52年までしかありませんでした。

大野 私が持っている資料では、小林さんや木下さんの名前が出てきま

す。小林平一さんが会長を辞めたのが、平成3年の10月です。それと同時に木下さんが会長になられた。常任理事会は、現在6月に行っていますが、当時の常任理事会は10月から11月の開催時期でした。ですから会長になられてから市長になられたと記憶しています。

仲川 小林会長に森田先生からそろそろ会長を交代してほしいという話があり、交代したと思います。

大野 平成3年10月に、その会があった場所はオープンしたばかりの丸広百貨店の6階の和室で、私も同席したことを覚えています。

仲川 当時は卒業生の教員がいて、主導権はそこにあったような気がします。私は教員団の推薦で同窓会に関わりました。卒業した年に農業科が廃止になりましたが、クラス代表で時々学校へ来ていたので、先生の推薦をいただいたと思っています。

大野 私が同窓会に関わったのは、平成元年10月の常任理事会に出て来いと言われ、何が何だかわからず、その場所に出たことからです。当時まだオープンしたての丸広百貨店の

『創立三十五周年記念誌』・『創立50周年記念誌』より

一〇〇年の歴史を重ねてきたなかで、節目の周年の記録として、創立三十五周年（一九五五）、五十周年（一九七〇）を機に記念誌を、七十周年を機に写真集が発行された。記念誌に掲載された豊高の創立当時から五十年、それぞれの時代の様相を彷彿とさせる貴重な記事、抜粋し、ここに掲載する。（掲載順は、各記念誌の掲載順とし、文章については、原則として記念誌に掲載された表記のままとしたが、読みやすいように句読点、段落等を加筆したものもある。）

『創立三十五周年記念誌』より



在職中を顧て

前学校長 鈴木 鐸

月並な言葉であるが――。思えば十年の歳月は、長くも短くもあり、一言には尽くせない。此頃の云い方をすれば、ロマンス・グレーと云われる髪を掻き上げ乍ら、来し方を顧みると、感慨ひとしおのものがある。

昭和二十年十二月七日、突然豊岡実業の校長へ転出を電話で命ぜられた。当時、敗戦後の国内は、虚脱状態の中へ新しいものの旧いものが雑多に流れこんで、てんやわんやの大騒動であった。

学校もいたる所で同盟休校が起り、県内においても秩農を始め、各所にその兆があった。

豊実も御多分に洩れず学校は混乱して校長が責を負って退いた後であった。私は若いし戦争中の川農の内紛を断乎処理したのが買われて、白羽の矢が立ったらしい。冗談にしろ視学官は「お前は喧嘩が上手だから」と云っていた。然し、私に云わしめれば祟もずるのである。去った木村校長は大校長であり、跡始末がなかなか困難であるとみたので、一応私をさしむけて、もう少しうまく行かなくても、若いからだと逃れるつもりだったのかも

知れない。それ位、むずかしい厄介な学校であつたらしい。

私は東大で十二年勤め、昭和十六年九月、始めて中等学校の教頭として、川農に出たので、誠に頼りない先生であり、教育行政の素人である。私は引受けた時、秘かに決心した敗戦によって旧教育は改められるであろうし、国そのものもどうなるかわからないのだから、皆で仲良く生き抜くことを考えればよい。民主主義になったのだから校長一人が学校を運営するのではなくて、むしろ皆の力を結集してやって行けばよい。それなら、どうにかやれるだろうと、菲才をかえりみず赴任した。

学校騒動はなかなか複雑で乱れ入りこんでいたようである。着任したら、内外から種々忠告があつたが、私は全くの白紙でのぞみ、既往のことにはふれない事にして、学校が内外共に和して行く事に努力した。私が平凡で力のない事がかえつて良かったのか、無事九カ年が勤まり、学校も人並に高等学校として育つていった。職員始め同窓地域社会の方々の深い御協力は、今でも忘れられず、心から感謝している。

私は小の虫を殺して大の虫を助けると云う事は封建的な時代の事で、小の虫を助ける為に、大の虫が遠慮もしなければならぬし、又少し位傷ついても仕方がないと思つてゐる。今の教育では、生徒を退学させることは、万難を排してさけるべきであると思う。不良と云われる青少年を、父兄と学校が見守つてなければ、世の中から不良は絶えないであらうし、又それであつてこそ、学校が、社会を發展させ幸福にすると云い得るのである。

在職中から頭を痛めていたのは、農商兼修と云う日本に一つしかない制度である。名政治家粕谷義三先生を始め豊岡地区の幾多の名士によって築